町民文芸

只見短歌会　令和七年五月詠草

久々に逢ひし知人に名の出づなれど面立ち確かにありし　目黒　富子

深雪に春陽差し受く一輪の福寿草咲き輝きて見ゆ　関谷登美子

二歳児はシャボン玉追ひかけてゆく新緑の午後虹に輝ふ　立花　奏音

雨けぶる川辺の道に佇めば緑の映り霧も流るる　新国由紀子

タンポポの綿毛ふわりと舞ふさまは小雪のやふに窓に映りて　渡部ヨリ子

只見俳句会　五月定例会

姉妹旅藤花ゆれる金色堂　真理子

震災の海辺の町の桜かな　睦子

春雷に駆け込む姿哀れなり　恒夫

人住まずつばめ飛びかう春さみし　恒夫

粽結う妻の指先見失う　礼

ふきのとう喰うて東を見て笑う　礼

客を待つ居間開け放つ花日和　一穂

参道に入るやつらつら雪椿　一穂

春野菜嫁に教えて播く手順　一恵

初燕先祖の墓を一廻り　一恵

赤と黄の母の残せりチューリップ　修一

すずらんや庭石の影ひっそりと　信

雨あがる唐津の城や夏木立　都

神宮に勝利の歓声風青し　都

学生服衿元正す入学子　味代子

母がいる「おかえりなさい」桜モチ　味代子

棚雲やこれでいいかと掃き寄せて　一恵

花曇り夫の尺八うとうとと　一恵

句友より四葉のクローバー差し出され

スッカナンボ折り取る先の故郷よ